

二葉亭四迷

余が言文一致の由来



# 余が言文一致の由来



言文一致に就いての意見、と、そんな大した研究はま  
 だしてないから、寧ろ一つ懺悔むし話をしよう。それは、自  
 分が初めて言文一致を書いた由来——も凄まじいが、つ  
 まり、文章が書けないから始まったという一伍一仕いちぶしじゆうの顛てん  
 末まつさ。

もう何年ばかりになるか知らん、余程前のことだ。何  
 か一つ書いて見たいとは思ったが、元来の文章下手で皆  
 目方角が分らぬ。そこで、坪内先生の許へ行つて、何どう

したらよかろうかと話して見ると、君は円朝の落語を知っている、あの円朝の落語通りに書いて見たら何うかという。

で、仰せおほの儘ままにやって見た。所が自分は東京者であるからいう迄もなく東京弁だ。即ち東京弁の作物が一つ出来た訳だ。早速、先生の許へ持つて行くと、篤とくと目を通して居られたが、忽ちはた礎と膝を打って、これでいい、その儘でいい、生なまじつか直したりなんぞせぬ方がいい、とこう仰有おっしやる。

自分は少し気味が悪かったが、いいと云うのを怒る訳

にも行かず、と云うものの、内心少しは嬉しくもあつたさ。それは兎に角、円朝ばりであるから無論言文一致体にはなっているが、茲にまだ問題がある。それは「私が……でムこぎいます」調にしたものか、それとも、「俺はいやだ」調で行つたものかと云うことだ。坪内先生は敬語のない方がいいと云うお説である。自分は不服の点もないではなかつたが、直して貰おうとまで思っている先生の仰有る事ではあり、先まず兎も角もと、敬語なしでやつて見た。これが自分の言文一致を書き初めた抑そもそもである。暫くすると、山田美妙君の言文一致が発表された。見

ると、「私は……です」の敬語調で、自分とは別派である。即ち自分は「だ」主義、山田君は「です」主義だ。後で聞いて見ると、山田君は始め敬語なしの「だ」調を試みて見たが、どうも旨く行かぬと云うので「です」調に定めたという。自分は始め、「です」調でやろうかと思つて、遂に「だ」調にした。即ち行き方が全然反対であつたのだ。

けれども、自分には元来文章の素養がないから、動もややすれば俗になる、突拍子もねえことを云やあがる的になる。坪内先生は、も少し上品にしなくちやいけぬという。



徳富さんは（其の頃『国民之友』に書いたことがあったから）文章にした方がよいと云うけれども、自分は両先輩の説に不服であつた、と云うのは、自分の規則が、国民語の資格を得ていない漢語は使わない、例えば、行儀作法という語は、もとは漢語であつたろうが、今は日本語だ、これはいい。併し挙止閑雅という語は、まだ日本語の洗礼を受けていないから、これはいけない。磊落らいらくという語も、さっぱりしたという意味ならば、日本語だが、石が転つているといふ意味ならば日本語ではない。日本語にならぬ漢語は、すべて使わないというのが自分の規

則であつた。日本語でも、侍<sup>はべ</sup>る的のものは已に一生涯の役目を終つたものであるから使わない。どこまでも今の言葉を使つて、自然の発達に任せ、やがて花の咲き、実の結ぶのを待つとする。支那文や和文を強いてこね合せようとするのは無駄である、人間の私意でどうなるもんかという考であつたから、さあ馬鹿な苦しみをやった。

成語、熟語、凡<sup>すべ</sup>て取らない。僅<sup>わずか</sup>に参考にしたものは、式亭三馬の作中にある所謂深川言葉という奴だ。「べらぼうめ、南瓜畑に落<sup>おつ</sup>こちた風じゃあるめえし、乙<sup>おつ</sup>うひつからんだことを云いなさんな」とか、「井戸の釣<sup>つるべ</sup>瓶じゃ

あるめえし、上げたり下げたりして貰うめえぜえ」とか、  
 「紙幟のぼりの鍾馗しようきというもめツけえした中揚底で折がわりい」とか、  
 乃ないし至は「腹は北山しぐれ」の、「何で有馬の人形筆」のといった類で、いかにも下品であるが、併しかしポエチカルだ。俗語の精神は茲ここに存するのだと信じたので、これだけは多少便りにしたが、外には何にもない。尤も西洋の文法を取りこもうという気はあったのだが、それは言葉の使いざまとは違う。

当時、坪内先生は少し美文素を取り込めといわれたが、自分はそれが嫌いであった。否いなむし寧ろ美文素の入って来る

のを排斥しようとして力つとめたといった方が適切かも知れぬ。そして自分は、有り触れた言葉をエラボレートしようとかかったのだが、併しこれは遂とう遂う不成功に終わった。恐らく誰がやっても不成功に終るであろうと思う、中々困難だからね。自分はこうして詰らぬ無駄骨を折ったものだが……。

思えばそれも或る時期以前のことだ。今かい、今はね、坪内先生の主義に降参して、和文にも漢文にも留学中だよ。

(明治三十九年五月)





日本文学電子図書館

---

余が言文一致の由来

著 者：二葉亭四迷

制作者：宮澤一郎

底 本：現代日本文學大系 1

「政治小説・坪内逍遙・二葉亭四迷集」

筑摩書房

昭和46年2月5日 初版第一刷発行

日本文学電子図書館